



Café

ミルクホール

ミルクホールを閉店して、2ヶ月半が経ちました。7月4日から、一つ一つが消えて、そしてついにすっかり何も無くなり、ずっと昔からもとそこにあった地面が現れそして、また一つ一つ組み上げられようとしています。BAR ROOMにあった柱も、HALLの壁も、天井も梁も、もとの場所に、その骨組みが組み上げられて、今、ようやくミルクホールを支える骨格が見え始めています。

あれが窓のあった壁、あれが、真ん中の大きな壁、あそこが、絵のかかっていた壁... 懐かしい部屋、今この手にざらざらとした漆喰の壁の触覚が残っている。私は最後にはずした大きな掛け時計の裏側に、その影のまま、時を止めるように白く残った壁を忘れない。換気口の下、くたびれ切った壁の染みや、土台が痛んで斜めにな



って転んでいた床を、私は忘れない。だれもない夜中、一人BARに座ってぼんやりと何かを見ていたあの日の事を私は忘れない。

ここにあった沢山のわけのわからなかったものを、私は忘れない。

そういえば、ミルクホールの物陰に潜んでいた、正直ものの悪魔は、今もこの中の骨組みのどこかに潜んでいるのかしら？

ミルクホールを大きく包んでいた、ちょっと怖い顔の天使は、まだこの場を離れずにいてくれるのかな？

何もかも戻って来ておくれ。

懐かしいミルクホールが、またいつか戻ってくるのだから。



COLUMN

鎌倉の猫事情

第九十九話



ミルクホールが閉店して2ヵ月半、ということ、どうやら仏壇と猫を連れてこの扇ガ谷の仮住まいに越してきて2ヵ月半、予定の5ヶ月の半分が過ぎたわけです。5ヶ月間の仮住まいには不安がいっぱいだったのですが、幸か不幸か、7月の土用丑の日にうなぎを買いに出かけた帰り道、思いがけない事故に遭い、ちょっとした怪我をした為に夏の間ベッドの上で過ごすという事態になり、案外時の経つのが早く感じられたことは幸いでした。それに、寝て暮らしてみるとなかなかいい家です。小町からそれほど離れていないのに、空気も、風も違っていて旅行気分も味わえます。スィーピーも、この家に馴染んでいるようです。今まで人生のほとんどをグーニーと暮らして、いつでもグーニーの後ろにいた猫ですから、今ではうちのただ一匹の猫として紹介されたり、時として前面に出なくてはならないのが、どうにも苦手なようで、誰か来るとそそくさとベッドの下に潜り込んで、どうかするとほとんど一日中そこにいます。といつてもご機嫌が悪いわけでもなく、それなりに満足いく暮らしであることは顔を見ればわかります。私はといえば、動けないベッドの上の暮らしでは、BSの動物を取り上げたドキュメント番組は時間を潰す重要なアイテムで、こればかりは、寝て暮らしながら、世界中の動物達の可愛い姿が見られるのだから、良い時代になったものだと感心してしまいます。その中にたまたま海の話があって、タコやら、ヒラメやら、深海に住む魚達のなかに、カサゴがいました。オニカサゴは煮ても揚げても美味しいですが、それではなく、カサゴの仲間、顔の周りにひらひらが付いている種類のカサゴです。これが、スィーピーによく似てたのには、驚きました。スィーピーの顔の縦じまと、カサゴのひらひらの縦じまがよく似てるんですね。そういえば、今、ベッドの下でお客さんをやり過ごしているのも、根魚の生態に近いんですね。そんなわけで、この暑い夏をスィーピーと私は、ベッドの上と下で過ごしていました。あんまり長時間ベッドの下にいた時は、この暑さでもあるし、まさか寝たまま死んでるんじゃないかと、ベッドをずらしてみると、大きなお尻ですやすや眠っていますから、心配には及ばないようです。そういう今も... ころ、いい加減に出てらっしゃい！

to be continued



ミルクホールタイムス総集編

「鎌倉ミルクホールタイムス」

№001～№100

ミルクホールタイムスを、創刊号より終わりまで編集致しました。私達と、グーニーとの初めての出会いから、グーニーとスィーピーの運命的な出会い、出産、グーニー家と宿敵との熾烈な戦いの顛末など、懐かしいエピソードがいっぱい。 ¥1500



ミルクホールタイムス
定期購読募集

ミルクホールタイムスは、毎月25日に発行しております。定期購読のお申し込みは、毎月25日郵送いたします。休業中のお申し込みは、ミルクホールホームページにて。また、FAX、メールなどで、お待ちしております。

年間購読料 ¥1500



Duke Ellington

名の由来

通称デューク・エリントンとして知られる、「デューク(公爵)」というニックネームは、子供の頃から自然な優雅さを身に付けきちんとした服装をしていたことから、親友エドガー・マッケントリーによって付けられた。

映画「絢爛たる殺人(Anatomy of a Murder)」の音楽でグラミー賞3部門を獲得したほか、合計9回グラミー賞を獲得している。また、1969年にはその貢献が認められて、リチャード・ニクソン大統領よりアメリカ自由勲章が授けられた他、1973年にはフランス政府からレジオンドヌール勲章が授けられた。2009年、コロンビア特別区から、エリントンとピアノをあしらった25セント記念硬貨が発行される。

日本でも、1964年(昭和39年)に新潟市で新潟地震が発生した際に日本公演を行っていたエリントンは、次に予定されていたハワイ公演の予定をとり消して東京厚生年金会館にて震災に対する募金を募ったコンサートを開催した。再来日した1966年、新潟市より国際親善名誉市民の称号が贈られた。「アドリブ・オン・ニッポン」は、「中国の音楽と、日本の音楽を区別できないようでは、音楽家とは言えません」と語るデュークの自信作にして傑作。同曲はエリントンが日本滞在中にみた日本の印象をまとめたもので、実に日本的で同時に、極めてエリントンの作品。「アドリブ・オン・ニッポン」を収録したアルバム『極東組曲』は、第10回グラミー賞(1967)のBest Instrumental Jazz Performance, Large Group Or Soloist With Large Groupを受賞している。

JAZZ

exhibition

エドワード・ケネディ・デューク・エリントン

(Edward Kennedy "Duke" Ellington) 1899年4月29日 - 1974年5月24日

1899年、ワシントンD.C.で生まれる。父親は、著名な白人医師ミドルトン・カスパートの執事であり時々ホワイトハウスへの仕出し業も行っていた。小学生の頃からピアノを習い始め、ハイスクールでは校内のパーティでピアニストとして活躍していた。同時期に音楽教師から高度な作曲理論を学び(「私の音楽に対する勉強は、GフラットとFシャープの違いを学んだことから始まった」という言葉は有名)、1916年にピアニストとしてデビューした。その後ニューヨークに進出し、1927年にニューヨーク市マンハッタン区ハーレムにある高級クラブ「コットン・クラブ」とバンド契約した。1930年代から第二次世界大戦後にかけて「A列車で行こう」(作曲はビルー・ストレイホーン)など、音楽史に残る様々な名曲を世に出した。

代表曲

極東組曲・女王組曲・ニューオリンズ組曲・A列車で行こう
昔は良かったね・ソリチュード・ムード・インディゴ
ロッキン・イン・リズム・ザ・ムーチ・黒と茶の幻想
キャラヴァン・スイングしなけりや意味ないね
イン・ア・センチメンタル・ムード・Cジャム・ブルース
パーデイド・サテン・ドール・ソフィスティケイテッド・レディ



Milk Hall News 2010

information!



JAZZ 屋台 (仮店舗)

カフェ・ミルクホール

2010年秋、2ヶ月限定の ミルクホールのJAZZ屋台!

何が起きるか、わからない
どこまでできるのか?
ミルクホールスタッフが、
工事現場でギリギリ取り組む
JAZZ 屋台カフェです。
8席ばかりの、刹那の空間で
JAZZと珈琲、お酒も少し...
スタッフ一同お待ちしております。

MENU

ブレンド珈琲・紅茶各種
チーズケーキセット
デザート・ホットドッグ
生ビール・日替わりおつまみ等



再生ミルクホールへ 2010年 12月初旬!

今年7月4日PM6:00にて、ミルクホールは休業致しました。
ミルクホールは37年間の営業を閉じましたが、現在ミルクホールは、もう一度再開する為の改築工事中です。地元斉藤建設の建築スタッフとミルクホールの現スタッフが協力し、また長年ミルクホールを支えた旧スタッフ達が駆けつけ、初めて店を作った1972年に還り、斉藤建設が築くしつかりした土台の上に、37年前にそうしたように、柱を建て、壁を塗り、一度外した窓やドア、カウンターを組み上げ、壊れた部分を一つ一つ手直して、ミルクホールをもう一度再現致します。

そしてミルクホールをこの先、子や孫の代まで、50年、100年と繋いで行くのが、私達の願いです。

12月初旬には、いつまでも変わらずここにあるミルクホールが戻ってきます。その日まで、今しばらくお待ち下さい。

ミルクホールマスター& スタッフ一同

HISTORY

KAMAKURA
場所の記憶 No.49

さよなら ミルクホール
2010年 7月4日 6:00 PM

ミルクホールのルーツ No.34 スタッフたち

ミルクホール唯一の2世代アルバイトの母と子を見ていると、人の縁とは不思議なものだと思えます。お母さんの方は、ミルクホール開店当初のメンバーで、若い彼女がミルクホールのBARの壁を塗っている姿が、今もアルバムに残っています。彼女はミルクホールでハンサムな青年と出会い結婚しました。そして、家庭に入り出産、十数年後、子育てから離れた彼女はアルバイトに戻りました。その頃小学生だった彼を、私たちは船が苦手な彼女に代わって何度か釣りに連れていったことがありました。その後、彼女は就職の為に店を辞めて行きました。そして4年前、成長して大学生になった彼がアルバイトの面接に来ました。始めは気づかなかったのですが、履歴書の名前と住所に見覚えがあり、聞いてみると、あの時の釣りに連れていった子供だということでした。思えば、ミルクホールがなかったら、生まれなかったかもしれない子です。そして、お母さんは、創立当時のメンバーで、息子はその店を閉める時のメンバーになったわけですから、奇縁を感じます。勿論彼が働いていた時は、「君はうちで生まれたようなものなんだから」と、うんと言いつけておきました。今のスタッフの両親も、初デートはミルクホールだったそうです。こんな奇縁は、次の世代にも、その次も、どこまでも繋がって欲しいものです。



次号へ続く

